

第 308 回くらしの植物苑観察会 2024年11月23日(土)

菊細工番付の変遷

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

菊細工とは一般に、鶴や象などの鳥獣、富士山などの風景、宝舟などの縁起物、汐汲などの物語を、小菊で形作った見世物のことをいい、菊人形の前身にあたる。菊細工は、文化・文政期に一度流行した後、天保15年(1844)と翌弘化2年(1845)に爆発的に流行し、幕末・明治期まで続した。今回は、この菊細工をコマ割り形式で並べた菊細工番付を紹介する。

1. 異版 色刷りと墨刷り

図1・2ともに、天保15年に板行された菊細工番付である。同じ図柄でありながら、図1は色刷り、図2は墨刷りである。2枚の番付は、色の有無のみだけでなく、屋根の格子の模様など細部における違いが見られた。



図1 「菊番附道順独案内」(国立歴史民俗博物館蔵) 天保15年



図2 「菊番附道順独案内」(国立国会図書館蔵) 天保15年

2. 鉢植販売に積極的な植木屋

花壇植えに対して鉢植の仕立ては、非常に少ない。その中で、団子坂の植木屋六三郎は突出して



図3 「染井駒入巢鴨新板改正造菊番附」
弘化2年(部分、個人蔵)



図4 「きくの番附」(個人蔵) 嘉永元年(1848)



鉢植率が高かった。六三郎は菊だけでなく松葉蘭、万年青などを染付の植木鉢に植えた様子が番付「染井駒込巢鴨新板改正造菊番附」に描かれている（図3）。

六三郎は、嘉永元年（1848）『藤岡屋日記』に、

大菊の鉢植。大サ輪が五寸、菊壺本ニて三十輪、高サ五尺鉢植也。是ハ珍敷菊也。

と、一幹 30 輪で花の直径 5 寸、高さ 5 尺という巨大菊鉢の目撃情報が記録される。「きくの番附」では、六三郎一人のみに植木鉢の仕立てが描かれるという程、割合が少ない場合も見られた（図4）。

3. 俳諧から読み取る菊細工・菊栽培

弘化2年の2種の番付「菊の寿力競」「きくのことふき」は、絵と俳諧で、菊細工の内容をあらわしたものである。ここでは、俳諧の内容から菊細工の評価と鉢植の普及状況を探ってみる。

伝中の太郎吉の細工に寄せて、

駒込の菊折兼る造り鉢 糶丁野橋

と、鉢から花を手折るのに躊躇する句は、菊鉢植に不慣れな点を物語る。菊の観賞には未だ花壇が優勢で、鉢植観賞は過渡期であったのである（図5）。

図6の最初の句、

その露でかくは菊見の庭切手 小春レン（連） 兎月

における「庭切手」は入場券のことである。近世では菊細工・菊人形観覧に入場料（木戸銭）がなかったとされているが、菊見ができる植木屋の庭に入るための入場券があった点がここから判明する。しかも同じコマに、

ふと植し菊や年々客もうけ ハン丁（番町） 翠峰

と、菊が利益を生み出すものとする句が記されている。



図5「菊の寿力競」 1枚目（部分、個人蔵）弘化2年

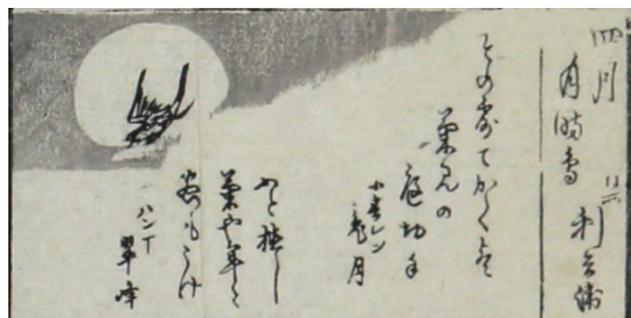


図6「きくのことふき」 1枚目（部分、個人蔵）弘化

今回は、近世における菊細工番付を検討することによって、次の2点が判明した。（1）花壇から植木鉢へと過渡期を迎えている菊栽培の様相が明らかになった。（2）同じ番付と考えられたものの異版を複数発見した。また、俳諧が印刷された刷り物の検討によって、菊細工が世間にどのようにみられているかについても新知見を得た。

.....

次回予告 第309回くらしの植物苑観察会 2024年12月21日（土）

サザンカの楽しみ方

加地 典子氏 埼玉県花と緑の振興センター 園芸相談員

13:30~15:30（予定） くらしの植物苑東屋 申込不要